

# 翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

## 目次

### ■ 翻訳に関する断章

山岡洋一

#### 一 時代は訳読

タレントやスポーツ選手、政治家が英語をしゃべるだけで感心されるのは、じつに不思議な現象だ。問題は、英語をしゃべるかどうかではない。何を話すかだ。この点に気づけば、しっかりと考えておくことがいかに重要かが分かる。いまの時代にしっかりと考えるには、英語で書かれた文書を読み、その内容を母語で理解する必要がある。こうした能力を育てるには訳読が役に立つ。

### ■ エッセイ 言葉の裏側

津森優子

#### 一 翻訳できない言葉こそおもしろい(2)

翻訳しにくい言葉からは、異文化の貴重な知恵が学べることがある。以前取り上げた *count one's blessings* にぴったりの訳と、もうひとつ大切な言葉を紹介する。

### ■ 翻訳論関係書籍ご案内

北村彰秀

『東洋の翻訳論—蔵蒙対訳「学者基本典」から』と『続 東洋の翻訳論—学者基本典を中心として』を紹介する。

**翻訳通信** 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp  
(@は半角文字に変えてください)

**定期購読の申し込みと解除** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

**バックナンバー** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

## 時代は訳読

翻訳通訳理論の研究者、[水野的氏のブログ](#)に「[時代は訳読?](#)」という記事があるのを見つけた。先月号の「翻訳調のインフラとしての英語教育」で書きたかった点が簡潔に示されていたのだ。水野氏は「訳読の理論的解明と有効な教育法としての訳読の方法を開発することが重要だと思う」と記し、「この辺の問題をやってくれる人はいないものか」と書いている。ここまではまったく同感なのだが、次が違う。「やはり自分でやるしかないのかな」と付けくわえているのだ。理論的解明や教育法の開発は若い研究者に期待するしかないと思っていたので、同世代の水野氏がこう書いているのを読んで感激した。そう時代は訳読なのだ。これからの時代に必要なのは訳読の教育である。そう考える理由をいくつか記しておこう。

### 語学の時代

明治から戦後しばらくまでは「語学の時代」だったと思う。英語などの外国語が「学」だった時代だ。この時期、とくに明治から大正にかけて、日本にとって最重要課題は欧米の優れた知識を吸収することであり、そのために不可欠な手段として学校教育でとくに重視されたのが「語学」であった。旧制中学、旧制高校の語学教育はじつに徹底していたようで、この時代に教育を受けた人たちは読み書き聞き話すすべての面にわたって、戦後世代とは比較にならないほどの力を身につけていたように思う。

翻訳という観点からみるなら、語学教育の柱のひとつになっていたのが、英文和訳に代表される訳読だ。翻訳という手段を使って、欧米の優れた知識を日本語で学べるようにすることが当時の国家目標であり、その際に使われた翻訳のスタイルが翻訳調であった。翻訳調で訳せる翻訳者を育て、選別することが当時の教育の目的のひとつだったのだから、翻訳調の簡易版といえる英文和訳が重視されたのは、きわめて合理的だったと思う。

もちろん、欧米の優れた文献を訳す翻訳者はそれほど大量に必要だったわけではない。全国津々浦々に作られた学校から、とくに優秀な成績をおさめた少数を大学に集め、そのなかでとりわけ優秀な学生

を政府機関で採用し、たとえば大学教授などの職を与えて、翻訳にあたらせた。こうして、学校での成績を基準に選ばれた少数の人たちが訳し、大多数の国民は翻訳書で学ぶという仕組みが確立した。

戦後しばらくまで、この仕組みはうまく機能していたように思う。当時の日本人は欧米の進んだ文化を学ぼうという学習意欲が強かった。そこで、抜群の「語学力」をもつことで選別されたごく少数の人たち、たいていは有名大学教授の肩書きをもつ翻訳者、そういう人が訳した本を買って読むことで、学習しようとした。

いまの感覚で考えれば、鼻持ちならない権威主義、エリート主義だと思われるかもしれない。だが、こうした仕組みはある時期まで、ごく自然なこととして受け入れられていた。これが自然だったわけはたぶん、野球の例を考えてみると理解しやすいかもしれない。元気な男の子ならたいていは野球をやっている。そのなかでとくに運動能力に優れていて自信のある子供が中学高校で野球部に入る。そのなかで、とりわけ優れた選手だけがプロになり、プロのなかでとりわけ優秀な選手だけがスターになる。野球が大好きだった子供のうちスターになるのは、たぶん10万人に1人ぐらいだろう。それ以外の人はファンとして野球を楽しむ。これと似た仕組みが学習という場で確立していただけなのだ。

この仕組みに綻びがみえてきたのはたぶん、1970年前後である。その背景は単純明快だ。はるかに遠く、理解することなどとてもできないと思われていた欧米が、この時期から心理的にかなり近くなってきた。翻訳によって欧米の進んだ知識を学ぶ努力が功を奏して、日本の社会が欧米に近づいてきたからだ。そうすると、大学教授が翻訳を本業とする理由がなくなるし、翻訳調の翻訳者を育成し、選抜するために英文和訳を教育する必要もなくなる。外国語教育は明治以来の目標のひとつを失うことになった。

### 英語コンプレックスの時代

その後にあられた時代、いまの時代を象徴する事実がいくつかある。たとえば、タレントやスポー

ツ選手、政治家が英語でスピーチをしたと報道されることが多い。政治家についていうなら、ある年齢以上の人なら、政治家がアメリカに行って英語でスピーチをしたと報じられているのをみて、驚くかもしれない。なぜ驚くかという、第1に英語でスピーチができるのは旧制高校で教育を受けた世代にとって当たり前のことであって、マスコミがわざわざとりあげるような話題ではないからだ。第2に、日本を代表する立場の政治家がアメリカに行くのであれば、優秀な通訳を連れて行って、日本語で話すのが常識だからだ。英語でスピーチができると自慢げなのが驚きだし、通訳を使わない非常識さが驚きなのだ。だがいまでは、こういう世代の人たちはるか以前に引退しているし、数も少なくなった。テレビのニュース番組で日本の政治家が英語で演説している様子が同時通訳付きで流されると、それだけで支持率が上昇するとみられているようなのだ。

なぜこのような不思議な現象が不思議だと思われなくなったのかを考えていくと、日本人の大多数がもっている英語コンプレックスに行き着く。

いまの英語教育では、若者の過半数が英語嫌いになるのだそうだ。英語は難しいという意識を植え付け、苦手意識と劣等感をたたき込んでいる。コミュニケーション能力、とくに会話の能力を育てることがいまでは英語教育の大きな目標になっていることを考えるなら、何とも不思議な現象だと思う。英語圏に行ってみるといい。3歳の子供でも英語をちゃんと理解し、しゃべっている。言語というのはそういうものなのだ。3歳の子供でもできることが、中学生や高校生、大学生にできないわけがない。

会話能力というのはいわば、空気の中にある。日本語の空気を吸ってれば、誰でも日本語を使えるようになり、英語の空気を吸ってれば、誰でも英語を使えるようになる。中学高校の英語教育で、英語の空気があるところで生活すれば会話はできるようになるという事実をしっかり教えておけば、若者の全員が英語ならそれほど苦労しないと思うようになって不思議ではない。その逆だということだから、まったく奇妙な現象が起こっているのである。この奇妙な現象があるから、タレントやスポーツ選手、政治家が英語をしゃべるといっただけで、マスコミがとりあげるという不思議な現象が起こる。

いまの学校はじつに不思議な場所なのだと思ってしまう。小さな子供たちをみてみるといい。まず目

立つのは、身体を動かすのが大好きで、いつも動き回っていることだ。だが、少し長くみると、もうひとつ目立つ点があることが分かる。好奇心が旺盛で、何でも知りたがることだ。言い換えれば、子供はみな、学習意欲がきわめて高い。この学習意欲を、学校という場所は活かすどころか、みな殺してしまい、苦手意識とコンプレックスだけを植え付けるようにすら思える。学校で苦手意識を植え付けられても、大学生になり社会人になれば、英語の重要性にいやでも気づく。だから、英会話学校が繁盛する。だが、なぜ英会話なのか。

いま、たいいてい人はタレントやスポーツ選手、政治家が英語をしゃべると聞くと、えらく感心する。だが、外国語というのは前述のように、その空気を吸ってれば誰でもしゃべるようになるものなのだ。大相撲の外国人力士はみな語学の天才なのかと考えてみればいい。そう考えていくと、英語をしゃべることだけで感心するのはどこかおかしいことに気づくはずである。英語の空気を吸っているというだけなのだから。

問題は、英語をしゃべるかどうかではない。何をしゃべるかなのだ。英語で中学生か高校生程度のことをしゃべるよりも、日本語でしっかりした発言をして、英語は通訳に任せる方がはるかにいい。この当たり前のことをしっかり確認しておくべきだ。

何をしゃべるかが問題だと気づけば、しっかりと考えることがいかに重要かが分かる。しっかりと考えるときは誰でも母語で考える。英語で考えるべきだという人がいるが、不自由な外国語を使えば、幼稚なことしか考えられない。だから、母語で、日本人なら日本語で考える。

だが、考えるとき、「馬鹿の考え休むに似たり」にならないようにするにはどうすべきか。答えは簡単だ。優れた考え、優れた知識などの優れた情報をうまく取り入れ、うまく処理することだ。考えるとは基本的に、外部から入ってくる情報の処理なのである。そしていま、優れた情報はかなりの部分、英語で入ってくる。そのうち翻訳されるのはごく一部であり、優れた考え、優れた知識をうまく吸収するためには、英語で書かれた文書をしっかり読んで、しっかり理解しなければならない。学者や研究者はもちろん、技術者やさまざまな分野の専門家、経営幹部、政治家などなどにとって、英語の本や論文、記事などで入ってくる考えや知識をうまく処理し、

母語で理解することが不可欠になっている。

ここに問題がある。英会話なら、英語の空気を吸ってれば、誰でも身につけられる。だが、優れた考え、優れた知識が書かれている文書を読む能力はそうはいかない。母語で書かれている文書ですら、しっかりと意識的に学ばなければ読めるようにならない。まして外国語で書かれた文書は、よほどの学習を積み重ねなければ読めるようにならない。

英語で書かれた文書を読み、その内容を母語でしっかりと理解し、考えられるようにするにはどうすべきか。ここで登場するのが訳読である。

## 訳読の時代

国際的な会議に出席するのであれば、英会話学校での勉強など、たいていの場合はそれほど役に立たないことに気づくはずである。まったく役に立たないというわけではない。雑談のときには役立つことが少なくないはずだから。だが、会議が始まると、とたんに心細くなる。このときに役立つのは英語の読み書きの能力、そして、英語で入ってきた情報をいち早く母語で処理し、考える能力である。そうした能力を養うのに最適の方法が訳読なのだと思う。

訳読とは、英語の文章を読み、それもかなり難しい文章を読んで、日本語に訳していく学習方法だ。いま、いちばん不人気な学習方法だといえるかもしれない。なぜ不人気かというと、英文和訳の伝統が根強いからだろう。わたしは少年です、あなたは少女です、あなたは少女ですか……などなど、正気とは思えない英文もどきを正気とは思えない日本語もどきで訳すのはかなわないと思うからだろう。これを嫌うのは正しい。これからの時代の訳読は、こうであってはならない。英語もどきではなく正しい英語の文章を、日本語もどきではなく正しい日本語で訳していくべきだ。母語で外国語を学ぶのが訳読の核心なのだから。

そのために欠かせないのがたぶん、第 1 に適切な文法理論と、第 2 に英語の語句の意味（訳語ではなく意味）を調べるための適切な方法である。

文法理論についていうなら、訳読のための文法はいまだに 5 文型などが中心だとみられる。5 文型は C・T・アニアンズの『高等英文法』（1903 年）で提唱されたものだ。1903 年というと明治 36 年である。日本が英語学習法を確立しようとしていた時期

に最新だった理論だ。単純で使いやすいという利点があるのだが、最善の文法理論だとは思えない。最大の問題はアニアンズが提唱した理論だという事実にある。OED の編集者であり、優れた学者なのだが、基本的に英語という世界のなかで英文法を考えたのも事実だ。ギリシャ語、ラテン語などと比較する作業は行っているが、少なくとも、日本語の世界から英語がどうみえるかは考えていない。そして訳読にあたって肝心の点は、日本語の感覚で英語を理解していくことだ。それには日本語文法と英語文法でどこに違いがあり、どこに共通点があるかをみていく必要がある。アニアンズに頼るわけにはいかないし、欧米の最新の文法理論にも頼るわけにはいかない。

第 2 の点では、英文和訳のために作られた英和辞典から脱却する必要があるのは確かだと思う。語句の意味を調べるとき、英和辞典には問題が多すぎるし、英英辞典は使い勝手が悪い。英英辞典の最大の問題は、アニアンズの 5 文型と同じ点、つまり英語の世界の感覚で英語の語句の意味を考えている点にある。英和辞典はどうかというと、英英辞典を下敷きに、語義の部分、つまり語句の意味を示す部分を訳語に置き換えたものにすぎない。英語の語句が日本語の感覚でどうみえるかは考えていない。だから、どちらも訳読のために適切だとはいえない。

インターネットの発達で、大量の用例を簡単に検索できるようになり、全文データベースを構築して分析するのも容易になったが、これで辞書が不要になるとは思えない。新しい辞書の編集にあたって、用例収集が楽になったといえるだけだろう。訳読にふさわしい辞書が必要だとすれば、それはそれは大変な作業になるはずである。国家的な事業といえるほどの熱意と経費が必要になると思える。いま、辞書が売れなくなっているのに、出版社が新しい辞書の編集に投資できるとは思えないという事情もある。

第 2 の点は訳読を中学高校の英語教育に取り入れるには不可欠だと思うが、もっと対象を絞り込めば、不要かもしれない。たぶん、訳読教育の対象になるのは、その必要を痛感している社会人と学生だろう。この層を対象に民間の英語教育として訳読を行うのであれば、英会話学校に代わるほどではなくても、ある程度の規模のある産業に育つ可能性がないわけではないと思う。

## 翻訳できない言葉こそおもしろい (2)

本誌 2005 年 8 月号で、「翻訳できない言葉こそおもしろい」と題して、日本語に訳しにくい、その精神を取り入れたい言葉をいくつか紹介した。

そのひとつが *count one's blessings* だった。なにか悪いことがあったときに、自分の恵まれている点を数え上げて自らを慰める言葉だ。これがすっきりとひとことで表せないと書いたのだが、先日テレビを見ていて、ぴったりの訳語に出会ってしまった。

美輪明宏が人生に役立つ心構えをいろいろアドバイスしているなかで、「幸せの数を数える」と言ったのだ。人は不幸の数ばかり数えがちだが、幸せの数を数えるべきなのだ。健康でいる、戦争がない、家族がいる、それだけでも三つの幸せ。

*count one's blessings* というフレーズを念頭にそう言ったのかどうかはわからないが、外国語に堪能な彼(彼女?)のことでだから、聞いたことはあるのだろう。それにしても、さらりと語呂のいい日本語で表現されている。

あえてひとことで訳すなら、とは言ったものの、前稿で「恵みを数える」などと訳してしまった自分が恥ずかしい。*blessings* の複数形は「恵み」という名詞だけでは伝わらない。「~の数を数える」とすることで、日本語としてずっと自然なひびきになる。

*blessings* の訳語も、「神からの恵み」という観念になじみの薄い現代の日本人には、「幸せ」のほうを受け入れやすいかもしれない。もちろん、日本古来の「天からの恵み」という考えに立ち返り、感謝をするのもよいだろう。

*count one's blessings* の名訳を報告したついでに、もうひとつ、訳しにくいけれど、いい言葉を紹介しよう。

あるオーケストラの演奏会でサントリーホールを訪れたときのこと。休憩時間のロビーでは、ワインなどの飲みものを求める客がごったがえしていた。

そこで目にした若い西洋人カップルの男性が、女性にこう声をかけた。“Would you like to have a drink, or would you like some fresh air?” 女性は小声でなにか答えて彼の腕を取り、二人はドアの外の涼しげな広場へ出ていった。

そのとき、はっとした。*fresh air* は、ワインやシャンパンに並ぶ選択肢として提供されるだけの、価

値あるものなのだ。

日本語で *fresh air* にあたる言葉はあるだろうか。「新鮮な空気、おいしい空気、いい空気」……どれも、あまり日常的には使わない。

それに対し、英語ではよく「ちょっと外に出てくれば」という意味で“Why don't you get some fresh air?”といった言い方をする。

日本人、少なくとも現代の都会に生きる日本人は、空気が *fresh* かどうかに、無頓着になってしまっているのではないか。*fresh air* にあたる言葉が身近にないために、それを求めることを忘れていないだろうか。本当は気持ちよく健やかに暮らすために、欠かせないものなのに。

海や山へ出かけるときだけ「空気がおいしい」と喜ぶのではなく、日常生活でも、もっと *fresh* な空気にふれ、ささやかな喜びを増やしてはどうか。都心でもその気になれば、空気のさわやかな公園などがあるものだ。

また、会議なので「よどんだ空気」のなかにいなければならぬときなど、休憩中に窓を開けるか屋外へ出るかして、会議室より *fresh* な空気を吸えば、コーヒーを一杯飲むのに匹敵するくらい、リフレッシュ (*refresh*) するはずだ。

朝起きて一番に窓を開け、朝の新鮮な空気を部屋に満たすのも日課にしたい。おなかの底から深呼吸すれば、もやもやした思いまで吹き飛んでいきそう。

『魔女の宅急便』(角野栄子作)では、仕事の依頼がまったくなく、ふさぎこんでいた主人公のキキが、閉めきっていた窓を開けはなす。窓からは春の風が入り、それをきっかけに仕事が舞いこみ、新しい街での生活が軌道に乗っていく。

作者は自身の経験から、この窓を開ける場面を描いたというが、物語を読んだ多くの読者から、自分も窓を開けたのをきっかけに道が開けていったという便りが届いたそう。窓を開け、いい空気を招き入れる行為には、そうした不思議な力があるのかもしれない。

そんな力を秘めた *fresh air* を、英語だけのものにしておくのはもったいない。日常のなかで、もっと意識して取り入れてみてはどうだろうか。

## — 著者より —

国内外において翻訳論の本は数多いが、その中で概論的に、あるいは翻訳論史の形で、いろいろな翻訳論が紹介されているものがあるのはありがたい。しかし、あまりにも欧米偏重の傾向が強く、東洋においては翻訳論は存在しなかったかのような印象さえ受ける。実際はどうかといえば、翻訳は昔から世界の各地で行われてきたのであり、欧米以外にも翻訳論と呼べるものはあるはずである。

幸いにも、最も有名な翻訳論と見なされているものは、東洋においても忘れられることなく、現在まで残り、また語り伝えられている。そこで、その掘り起こしをしたいと思い、「東洋の翻訳論」を執筆するに至った次第である。一つの翻訳論の掘り起こしから、周囲の状況が目に見え始め、また、当時の翻訳のノウハウ、翻訳に対する考え方といったものが、さらにはほとんど忘れられたような翻訳論までもが芽づる式に出てくることには心躍らされる。この東洋の遺産の全体としての価値は未知数であるが、見るべきものがある以上、我々は東洋からも学ぶべきであり、また、歴史から学ぶことの重要性は論を待たない。翻訳論研究に一石を投じたい。

## 東洋の翻訳論 ——蔵蒙対訳「学者基本典」から——

北村彰秀著（個人出版）

A5版 全60ページ、定価 735円（税込）

## \*内容\*

膨大な量からなる大蔵経の漢訳、チベット語訳、モンゴル語訳にあたっては、翻訳方法についての議論がなされ、翻訳論が書かれ、翻訳用の辞書が編纂された。大蔵経の翻訳に対するアプローチ自体が、それだけでも非常に興味深いものであるが、翻訳の間に生み出された翻訳論も、翻訳のノウハウの記録として、非常に貴重なものである。その中で最も高い水準に達していると思われるのが、仏典モンゴル語訳の際に編まれた「学者基本典」と呼ばれる辞書の序文にある翻訳論である。

本書では、今までほとんど知られていなかったこの翻訳論を日本語に全訳し、箇条書きの形にわかりやすくまとめ、分析を試みた。250年以上前に書かれたにもかかわらず、非常に実践的、網羅的なその内容は、現代も翻訳のすぐれた手引きであり、またそれと同時に、興味あるアプローチを提供している。

## —目次—

はじめに

第1章 「学者基本典」とは

第2章 「学者基本典」序文等の日本語訳（抜粋）

第3章 まとめ（箇条書き）

第4章 歴史の中での「学者基本典」の翻訳論

第5章 欧米系の現代の翻訳論との比較考察、評価

あとがき

付記1 「学者基本典」という表題について

付記2 印刷、製本について

付記3 マハーヴェットパーティについて

付記4 翻訳論の著者について

付記5 「学者基本典」出版の場所と異本について

参考文献等

(モンゴルで印刷のため、多少インクの濃淡あり。)

＝読者の声＝

「とても興味深いです。」

「モンゴルに、こういった古典があったのかと、驚かされています。」

## 続 東洋の翻訳論 ——学者基本典を中心として——

北村彰秀著（個人出版）

A5版 全55ページ、定価 735円（税込）

### \*内容\*

仏典漢訳の翻訳論を全体的に眺め、また中国近代の林語堂の翻訳論にも触れ、「学者基本典」の翻訳論との比較を試みる。それにより、正編、続編をあわせて見ると仏典の漢、蔵（チベット）、蒙訳の主要な翻訳論や翻訳方針を概観できる。国内外に類書ほとんどない現在では、貴重な情報源ともなるであろう。記述にあたっては、専門家でなくとも十分理解できるように努めた。

### —目次—

前書き

はじめに

第1章 仏典漢訳の翻訳論の概観

第2章 五失本三不易との比較

（1）本文（2）解釈（3）基本典との比較

第3章 僧祐の翻訳論との比較

（1）同異記の内容（2）同異記と基本典の比較

（3）前後出経異記（4）前後出経異記と基本典

第4章 彦琮の翻訳論との比較

第5章 玄奘の五種不翻との比較

第6章 宋賛寧の翻訳論との比較

第7章 漢訳仏典の難しさについて

第8章 林語堂の翻訳論

結論

あとがき

正編の訂正箇所、追加言及

参考文献

正編、続編の英文要旨

基本典翻訳論の原文（キリール文字転写）

---

### 近刊 東洋の翻訳論 第3巻

主な内容——翻訳における専門用語の扱い、更なる埋もれた翻訳論を求めて、  
主な仏典翻訳論の英訳等（予定）

---

取り扱い書店

アジア文庫

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-15 内山ビル5F

（神田すずらん通りの内山書店の上の階） TEL 03-3259-7530

個人出版のため、上記以外の一般の書店では扱っておりません。また、郵送ご希望の場合は、下記メールアドレスにご連絡ください（国外も可）。代金銀行振込、入金確認後発送、郵便事情にもよりますが、1週間前後で届くことと思います。

e-mail: [a\\_kitamura07@yahoo.co.jp](mailto:a_kitamura07@yahoo.co.jp)（aのあとはアンダーライン）

#####

---